

メルヴィルにおける歴史とリチュアル*

竹 内 勝 徳

序

メルヴィルは、長編ロマンス『マーデイ』において、ヴィヴェンザなる島をアメリカに見立て、急進的民主主義者に対する謎の文書という形で、国の政治体質を疑問視している。“And the grand error of your nation, sovereign kings! seems this: — The conceit that Mardi is now in the last scene of the last act of her drama; and that all preceding events were ordained, to bring about the catastrophe you believe to be at hand, — a universal and permanent Republic.”（『マーデイ』525）ここでメルヴィルは、終末後の繁栄のレトリック、即ち、「カタストロフィ」に近いがそれは共和制の永続の前触れであるという論調を、当時の政治言説に顕著な特徴として読み取り、それを批判しているのである。この一節からわかるように、アンティベラムのアメリカでは、前世紀から引き継いできたミレニウム意識が様々な分野でかなり拡大していた。ミレニウムは進行中であるという言説が流布していたのである。このミレニアリズムにもいくつかの系統があったが、メルヴィルが言及した拡大主義の文脈で捉えられるものが最も一般的であったと思われる。

このような、終末をイメージさせるレトリックは、実はピルグリム・ファーザーズの時代から継続し、熟成されてきたものである。周知のように、バーコビッチはその一連の研究により、植民地時代から19世紀に到るまで、アメリカの政治経済が旧約聖書に依拠する一定のレトリックによってその推進力を得ていたとしている。説教や演説で多用されたそのレトリック・パターンは、①隷属状態や退廃への嘆き、②過去の歴史の参照、③神の裁きの予兆、④約束の地の実現、というプロセスで、継続的に擬似のミレニウムを想定するものだった。

この際、アメリカ国民は常に出エジプト記のイスラエル人に譬えられ、彼らを隷属させるエジプトはイギリス、そして約束の地カナンは実現されざる丘の上の町、つまり絶えず先延ばしされる理想の国とされていたのである。カナンが先延ばしされることで、このレトリックは入植時から、大覚醒運動、経済発展、独立革命、産業革命、そして南北戦争と、繰り返し使用されてきた。そして、過去の実績を積み上げることで、将来の展望さえ規定し得るリチュアリスティックな力となったのだ。¹ メルヴィルが批判しているのは、まさにこのエレミア・レトリックなのである。その代表例として、ウィリアム・アーサー判事の演説の一部を挙げる。“the uncertainties of life, and the instability of human affairs … (隷属状態や退廃への嘆き) Flying from religious and political tyranny, [the Pilgrim Fathers founded here] … a land of freedom (過去の歴史の参照) … With a benignity imitating that so pre-eminently displayed by the God of the flying and homeless Israelites … the illustrious Apostles of the Constitution … have given to mankind that which will serve forever as a pillar of cloud by day and a pillar of fire by night to guide this chosen people … (神の裁きの予兆) We have reached the Land they promised, and have fed upon the fatness of the vine and the fig-tree. (約束の地の実現)” (*American Jeremiad* 145-7)

メルヴィルはこのレトリックを批判するだけでなく、その直後に自らの歴史観、もしくは時間感覚と呼べるような思いを対置している。“Time is made up of various ages; and each thinks its own a novelty. But imbedded in the walls of the pyramids, which outrun all chronologies, sculptured stones are found, belonging to yet older fabrics … as your forests grow apace, sovereign kings! overrunning the tumuli in your western vales; so, while deriving their substance from the past, succeeding generations overgrow it, but in time, themselves decay.” (『マーティ』525) 永遠の時の流れの中で、あらゆる世代が入れ替わり、朽ち果てながら、歴史を形成しており、エジプトのピラミッドさえ歴史の起源ではない、とする考え方である。しかしながら、バーコピッチによると、エレミア・レトリックは反逆と独立を基本理念としているため、それに対立する反動力さえ囲い込む

柔軟性を有しているという。エマソンやソローが用いるレトリックさえ、エレミアの中に回収されていったというのだ。では、メルヴィルの時間感覚がエレミア・レトリックとの直接的な接触を余儀なくされたとき、そこにはどのような力関係が展開されるのだろうか。また、結果として読み取れた、その力関係にはさらに如何なる政治性、芸術性が表れるのだろうか。こうした問題を提起するとき、最適な題材となるのが、メルヴィルがエレミア・レトリックを正面きって取り扱った『イスラエル・ポッター』である。メルヴィルは「エレミアの嘆き」のパターンそのものとさえ言えるヘンリー・トランブルの『イスラエル・ポッター伝』²を自分の作品の種本としている。当然そこには、先に述べたメルヴィル独特の時間感覚が絡み合ってくる。本論の主な中身は、その絡みの分析作業なのだが、まずは前段階としてメルヴィルの時間感覚、あるいは大きな枠組みレベルでの歴史観といったものをもっと詳しく考察しておく必要がある。

1 メルヴィルの時間感覚

過去の歴史がすべらかに現在、未来へと重ねあわされるエレミア・レトリックと違い、メルヴィルは過去の経験を2度と取り戻せぬものとして描くことがある。

Safe aboard of a ship — so long my earnest prayer — with home and friends once more in prospect, I nevertheless felt more weighed down by a melancholy that could not be shaken off. It was the thought of never more seeing those, who, treated me so kindly. I was leaving them forever.

So unforeseen and sudden had been my escape, so excited had I been through it all, and so great the contrast between the luxurious repose of the valley, and the wild noise and motion of a ship at sea, that at times my recent adventures had all the strangeness of a dream; and I could scarcely believe that the same sun now setting over a waste of waters, had that very morning risen above the

mountains and peered in upon me as I lay on my mat in Typee. (『オムー』 7)

彼自身も敬愛した父親の死や、豊かな生活からの転落から船員生活と、過去の生活から際限なく切り離されてきた。そうした経験がこのような形でテキストに現れているのかもしれない。これは、長編『レッドバーン』にも繰り返される中心的なモチーフである。しかし、その経験に対する補償作用というか、彼の作品には、取り返せないはずの過去の記憶が現在の自分の視界と交錯し、実体験に迫る勢いで訴えかけてくる瞬間が記されている。

As an instance of the curious coincidences which often befall the sailor, I must here mention, that two countenances before me were familiar. One was that of an old man-of-war's-man, whose acquaintances I had made in Rio de Janeiro, at which place touched the ship in which I sailed from home. The other was a young man, whom, for four years previous, I had frequently met in a sailor's boarding-house in Liverpool. I remembered parting with him at Prince's Dock Gates, in the midst of a swarm of police-officers, truckmen, stevedores, beggars, and the like. And here we were again: — years had rolled by, many a league of ocean had been traversed, and we were thrown together under circumstances which almost made me doubt my own existence. (『オムー』 6)

Before leaving Tahiti, I had the curiosity to go over this poor old ship, thus stranded on a strange shore. What were my emotions, when I saw upon her stern the name of a small town on the river Hudson! She was from the noble stream on whose banks I was born; in whose waters I had a hundred times bathed. In an instant, palm-trees and elms — canoes and skiffs — church spires and bamboos — all mingled in one vision of the present and the past. (『オムー』 102)

この現在・過去の断絶／交錯は、次の『レッドバーン』からの一節をみると、やはり連動し、有機的に関わっていることが分かる。

oh! then I would have given any thing if instead of sailing out of the bay, we were only coming into it; if we had crossed the ocean and returned, gone over and come back; and my heart leaped up in me like something alive when I thought of really entering that bay at the end of the voyage. But that was so far distant, that it seemed it could never be. No, never, never more would I see New York again. (『レッドバーン』 33)

I would certainly fall overboard and be drowned. And then, I thought of lying down at the bottom of the sea, stark alone, with the great waves rolling over me, and no one in the wide world knowing that I was there. And I thought how much better and sweeter it must be, to be buried under the pleasant hedge that bounded the sunny south side of our village grave-yard, where every Sunday I had used to walk after church in the afternoon; and I almost wished I was there now; yes, dead and buried in that church-yard. (『レッドバーン』 33)

つまり、過去からの断絶に対する一種の埋め合わせとして、過去への空想的退行が位置付けられると思える。そのプロセスに死の衝動が絡むのも注目すべき点である。このあたりの表現はまだ芸術的に昇華された段階ではないので、何やらノスタルジックな印象を感じさせるが、創造的退行とか、死の衝動からエロスの希求というプロセスもあるように、現在と過去の交錯は別の作品では、むしろ現在と過去の超越的融合として立ち現れる。

Dreams! Dreams! Golden dreams: endless, and golden, as the flowery prairies, that stretch away from the Rio Sacramento, in whose waters Danae's shower was woven; prairies like rounded eternities: jonquil leaves beaten out; and my

dreams herd like buffaloes, browsing on to the horizon, and browsing on round the world; and among them, I dash with my lance, to spear one, ere they all flee.
(『マーデイ』 366)

In me, many worthies recline, and converse. I list to St. Paul who argues the doubts of Montaigne; Julian the Apostate cross-questions Augustine; and Thomas-a-Kempis unrolls his old black letters for all to decipher … and Zoroaster whispered me before I was born. I walk a world that is mine; and enter many nations, as Mungo Park rested in African cots … My memory is a life beyond birth; my memory, my library of the Vatican, its alcoves all endless perspectives, ever-tinted by cross-lights from Middle-Age oriels.

And as the great Mississippi musters his watery nations: Ohio, with all his leagued streams; Missouri, bringing down in torrents the clans from the highlands; Arkansas, his Tartar rivers from the plain; — so, with all the past and present pouring in me, I roll down my billow from afar. (『マーデイ』 367-368)

これを見ると、メルヴィルは過去と現在の夢想的融合において、その芸術の最も大事な部分を生み出していることがわかる。過去・現在の断絶から、その交錯、融合は、抑圧、創造的退行、昇華というプロセスを経て、彼の芸術創作の根幹を占めているのである。それは死への衝動から芸術的再生というリチュアル・プロセス³となっているのだ。

では、このメルヴィルの時間感覚や時間をめぐる一定のメカニズムは、時代を席卷した歴史的レトリックとどう関わるのだろうか。

2 『イスラエル・ポッター』について

トランブル版の主人公イスラエルは、結婚に反対する父親に反発し、放浪の旅に出たところから、数奇な運命を辿る。独立戦争に従軍し、捕虜としてイギリスへ連行され、ジリ貧の逃走生活を続けるうちにイギリス国王に出会うも、

周囲の反米感情ゆえ安心できず、ひよんなことからフランスに駐留するベンジャミン・フランクリンの通信員として、イギリス沿岸奇襲作戦に加担する。その後、ロンドンで結婚し、家庭を持った彼は貧困の中で生涯を過ごし、老年になってやっと祖国送還の資格を得るが、アメリカで彼を待っていたのは年金支給を拒む行政だった。基本的にアービング風のプロットと言える。

トランブル版で描かれるロンドンは、当時ジョージ・フォスターらが流行らせていた所謂アーバン・スケッチ風の扱いで、その極貧の生活がこれでもかと強調される。彼の職業は当初れんが職人であった。つまり、イギリスでの隷属状態とれんが職人というのは、エレミアのレトリック・パターンに照らし合わせると、れんが職人＝旧約のエジプトにおけるイスラエル人の職業であり、もちろんイギリス＝エジプトであり、カナンからエジプトに移り、約束の地への生還を願うイスラエル人とイスラエル・ポッターは重なり合う。フランクリンからアメリカ帰還を褒美として雇われながらも、その約束は先延ばしにされ、結局79歳になるまで祖国へ帰れなかったイスラエル。ついに帰国を果たしても、彼の目の前の状況は幻滅でしかなかった。つまり、約束の地が次々に先延ばしされることで、イスラエルは放浪を繰り返しているにすぎない。この先延ばしの論理はバーコビッチが指摘するエレミア・レトリックの特徴的パターンである。

メルヴィルはこの作品を元に自身の『イスラエル・ポッター』を創作した。この場合、二つの大きな問題点を提起することができる。まず第一点は、当然予想されることだが、メルヴィルが自分の作品を、特に英米の政治的確執に関し、トランブル版に対するパロディとして提示しているということだ。この点については、ロウジンからの以下の引用で十分説得力があるのではないだろうか。“The real Israel told an extended tale of old world misfortune, and allowed himself to hope for redress from the new. He devoted half his memoir to London. By drastically condensing the London material, Melville avoided counterposing old world despair to new world hope.” (Rogin 228) 旧世界での苦難から新世界での希望という基本構図が暈されれば、エレミア・レトリックは機能しない。メルヴィル

はまずパロディ化によって、原本の重要な政治的要素を骨抜きにしているように見える。しかしながら、後に述べるように、このパロディ化は単にメルヴィルのイギリスびいきやトランブル版への敵意から発生したものではない。これから述べるリチュアル化の中で、政治的確執が解消された。つまり、リチュアル化がパロディ化を必然的に引き起こしたということである。次に第二点として、メルヴィルがトランブル版にないいくつかの興味深い書き換えを行っているということがある。その中で非常に重要なものとして、①エンディングにおいてイスラエルが自分の生家の痕跡を訪れるピクチャレスクな場面、②実在の軍人ジョン・ポール・ジョーンズの挿入がある。問題点をこの2点に絞って、考察を深めたい。

メルヴィルは作品冒頭のバンカーヒルへの献辞の部分で、“the merit of the story must be in its general fidelity to the main drift of the original narrative”と、自分の作品が原本に対して忠実であることを宣言したうえで、自作終盤部分の仕上げ方について次のように述べている。“I…durst not substitute for the allotment of Providence any artistic recompense of poetical justice; so that no one can complain of the gloom of my closing chapters more profoundly than myself.”(『イスラエル・ポッター』viii) トランブル版との出会いを“the allotment of Providence”として受け止め、敢えてオリジナルの筋を優先した。よって、最終章の暗さはメルヴィル自身にとって最も読むに耐えない、ということだろう。これは全くの逆説である。なぜなら、彼は実際には最終章を徹底的に彼流の文章に書き換えているからだ。トランブル版が年金不認可や土地財産の喪失など、現実的、社会的問題を描いている、即ち、祖国への希望がエレミアの嘆きへ推移したところで終わっているのに対し、メルヴィルはその暗いエンディングをむしろ自身が献辞で否定した“artistic recompense of poetical justice”によって描き直しているのである。献辞で逆説的に否定するということは、彼がその描き方をそれだけ意識していたということである。彼の本意を探ってみよう。

Blindly ranging to and fro, [Israel and his son] next saw a man ploughing.

